琉球大学学術リポジトリ

関わり合いを増やす集団づくり：生活班を活用して

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学大学院教育学研究科 公開日: 2017-06-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 比嘉, 君代 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/36791

関わり合いを増やす集団づくり

―生活班を活用して―

比嘉君代

琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻・浦添市立当山小学校

１．テーマ設定の理由

私たちを取り巻く社会の生活水準は向上し便利になっている。その反面，人々の生活は「ゆとり」を失い，慌ただしいものになってきたことも否めない現実である。家庭や地域社会も地縁的な結びつきや連帯意識も弱くなり，家庭教育の低下も言われており，このような社会全体の変化の中で，子どもたちの生活も大きく変化している。物質的な豊かさや便利さの中で生活する一方，人との関わりが希薄になり，人間関係がうまく築けない子，学級できまった友だちとだけ遊ぶ子，関わりを持とうとしない子の姿がみられ，社会的にもコミュニケーション能力の育成が課題としてあげられている。実際に遊びのスタイルも集団から個へと変化していると考えられる。

今，学校における集団活動の意義は必要不可欠であるがゆえに，集団の一員としての在り方を学ぶ集団活動，つまり学級づくりは重要である。

以上を踏まえ，私の学級づくりを振り返ると，道徳の時間や日記の紹介等でそれぞれのよさに気付かせるよう取り組んできた。また，帰りの会では「友達のよいところ」を発表し，素直に仲間を称賛できる雰囲気づくりも心がけた。しかしそれでも取り組みがうまく進まない学級，子どもたちと十分な信頼関係が築けない学級に直面した。気になる子どもをどうにかしたいという思いから，その子どもばかりに気持ちが向いたため，まわりの子への対応が疎かになり集団との関係を築くことが弱くなり，そのため注意中心の管理主義的な指導が増えた。担任と子どもの１対１の関わりが増えるにしたがい，子ども同士の横のつながりをつくる意識は薄れた。そのような状況で子ども同士が関わるのは難しい。改めて，担任と子どもの関係づくり，子ども同士の繋がりの大切さと，集団として成長する学級について考えてみた。

２．研究の目的

生活班での関わり，つまり子ども同士の関わりを増やすことで，よい仲間・よい集団として関わる力が身につくのではないかと考え，本研究を通して集団の成長を検証したい。

３．集団づくりの意義

小学校学習指導要領の特別活動の目標には「人間関係」が加えられた。これは，特別活動が，望ましい集団活動を通して，よりよい生活や人間関係を築こうとする主体的，実践的な態度を育むものだと明確にしたものである。また集団づくりの必然性として，全生研常任委員会(1972）では「人間はただひとつの社会関係のなかで生きているもので

はなく，さまざまな社会関係の網の目のなかで生きているし，生きていかなければならない。」とある。学級という社会集団が，それぞれの価値や思いの違いから直面する矛盾や葛藤を互いに解決する場となる。そのために話し合いが設けられ，いじめや差別をなくし，民主的な営みが保障されなくてはならない。子ども自身が話し合いの中で，自分たちのためのルールを築き，守り，振り返る過程で，社会性が育まれると考える。

学級の集団づくりを考えたとき，一つの方法として班づくりが挙げられる。班の必要性について大西(1972)は「親密感を持ち接触しあっているという連帯感を持っているのは，たかだか，５，６人のグループにすぎないということです。その５，６人をのぞくと，その他の者には，彼らが同じ集団に属しているという意識すら持っていないということです。…中略…彼らの接触を恒常的につくり出してやらない限り，学級は集団として真に生徒たちに認識されているとはいえない」と述べている。つまり仲良しグループのままでは，学級集団としての社会性は育たないということである。そこで，班という小集団のなかで問題に対して話し合い，解決・改善する活動から，班対班の関わり合いを重ねることで，学級集団としての成長が導かれていくと考え，班活動を通してどのような関わり合いを増やせば有効か追究することにした。

４．課題発見実習を通して

（１）どこで生活班を使っているか

課題発見実習Ⅰの観察から，生活班と学習班での活動は見られたが，係や当番ではさほど班を使っているようには見られなかった。そこで，関わり合いを増やすため，課題発見実習Ⅱでは，班活動の活発化と子どもの関わりを増やすため，学級担任と相談し生活班を下記の活動にも取り入れた。（公立Ａ小学校：対象２学年）

・係活動を班で受け持つ	・給食当番を班で受け持ち，班で食べる	
・清掃当番も班を中心に受け持つ	・授業で班を使う	・学級イベントも班を使う

連携協力校，協力学級の生活班活動の実態は，清掃当番と学習時に生活班を使うという状態であった。また学校全体では下記のような取り組みであった（19 学級）。

・学習班 100%　・給食当番 14%　・係 14%　・清掃当番 36%　・給食時間 64%

２学期始めの席替えとともに生活班の新しい取り組みについて子どもと確認した。授業観察を通して班での活動に差がみられたので，班にリーダーを置き，話し合いの司会や連絡の確認役など，授業以外でも関わり合う場を設けた。

表　課題発見実習Ⅱにおける活動の記録

月日	活　動　内　容	班やペアでの関わり合い
９月１日	席替え	替え方について意見を出させる（個人）
７日	係・清掃・給食当番決め	事前に必要な係を考えさせる（個人）
26 日 実習開始	学活：係活動について ９月の係活動の振り返り	係活動の意味を確認して振り返らせる 今後の取り組みを話し合い，発表
27 日	算数：「直線」の意味を知る 道徳：友達について考える	ペアや班で相談や答え合わせ 互いの考えを出し合う

10 月 4 日	国語：詩「てんとうむし」 学活：席替え・係・他当番決め	個人→班で音読の工夫を相談→班で発表 必要な係について考えておく
5 日	国語：詩をよもう 「てんとうむし」	班で音読の工夫を確認→班で発表
6 日	国語：詩をよもう 「せかいじゅうの海が」	個人（一ヵ所）→班で音読の工夫を相談 →班で発表
7 日	国語：詩をよもう 「せかいじゅうの海が」	班で音読の工夫を確認→班で発表 発表会の準備（役割分担などの確認）
11 日	国語：詩の音読発表会をしよう	班で練習→ペアで発表→感想発表

（２）係を生活班でうけもつ

９月の特別活動の時間では，係活動の振り返りと見直しをした。「係活動はなぜあるの」と聞くと「皆が楽しく過ごすため」「皆と仲良くするために」と出た。皆のためにという視点で活動内容を見直すことにした。班での話し合いの後，早速保健係から「保健クイズ」が昼休みに実施された（写真１）。ほとんどの子どもが参加していた。翌日には，保健係から「保健クイズ」，図書係から「本の読み聞かせ」，イベント係では「隠れミッキー（宝探し）」が行われた。すると他の係も刺激をうけ「クイズ」や「出しもの」などの計画を始めた。

【写真１】

２~３日後には，他の係からもクイズや「出しもの」が出されるようになった。そこへ「曜日別に係の『出しもの』をする日を決めました。」と表を作ってきた子が現れた。「出しもの」だけが係活動かと迷うところはあったが，学級担任と相談した結果，以前より子ども同士が関わる姿が見られるようになったことを認め，様子を見ることにした。翌週には席替えと係・当番決めをするので，週末で新しい生活班でやりたい係を考えさせ，一週間の班活動を日記に振り返らせた。

～子どもの日記より～

●わたしが，次のグループ（生活班）でしたいことは，楽しく話し合いをしたいです。なぜかというと，グループを楽しくしたいからです。いろんな，意見がでたらいいなと思います。新しいグループで力を合わせてがんばります。

●わたしは，つぎのグループでリーダーになりたいです。なぜなら，発表も大きな声で言えるようになりたいからです。次のグループで立派なリーダーになりたいです。

（３）班活動の中の A 男の姿

自分の考えを書いたり話したりすることが苦手な A 男がいた。A 男に対して班の仲間は「何も考えないから」と不満をもっていたため，話し合いがうまくできなかった。タイミングよく席替えがあり，本人の希望する席に座ることができた。今度の班は面倒見のよい B 子が隣になったこともあり，班でうまく関われるかどうか様子を見ていこうと学級担任と話をした。

授業１　班での音読発表。最初は各自工夫したいところを出し合う場面。A 男が工夫したい部分に線を引いたところでどうやって読むか尋ねるとA男は答えられなかった。そこで，B 子に「A 男が迷っているみたい，聞いてみて」言うと，B 子が「どんなふうに読みたいの？」と聞き始めた。同班の C 子も心配そうにA男を見ている。B 子がA 男に「こうしたら」「○○といういみ？」と問い，A 男は「うん」「そう」と返事をする。C 子もとなりでうなずいている。発表では，B 子と C 子の声よりA男の声は小さくプリントで口元を隠しながらの発表だった。それでも自分の担当部分を言うことができた。発表後，席へ戻りながら嬉しそうなA男の表情が見られた。

授業２　音読発表会。始めは列ごとの発表，そして全体への発表とした。前時での詩を画用紙に書く作業で，いつものA男なら書くことを嫌がりダラダラと過ごす姿が見られたが「一番きれいな字で書いている」と言いながら仕上げていた。発表では，班の仲間と声をそろえて音読することができた。発表後，満足そうな表情が見えた。単元終了後のA男の詩を紹介する。

「音読」	ぼくは　みんなの前で　国語の本を読んだ　ちょっと　てれた はじかさたん　いい気もちになった　ぼくは　本で顔をかくした

（４）関わり合いを重視した班活動

公立Ｂ小学校（対象６学年）では特活の授業で「班で朗読発表」「詩を書こう」を行った。「班で朗読発表」では班で朗読しながら手拍子や決めポーズをどう取り入れるのか相談，練習して発表となる。授業後の感想で関わり合うのは良い 52%，○○の良さを知った 15%という結果を得た。「詩を書こう」では，詩から作者の背景を読み取ることをクイズ形式で取り上げ，班で相談して解答する。その後自分で詩を書き，作品を教師が紹介する。まわりの子どもから作者へ質問や励ましの言葉がかけられた。感想から関わり合うのは良い 25%，○○のことを知った 48%の結果を得た。

５．到達点と課題点

実習校の学級担任と子どもの感想をまとめると以下のような結果であった。

到達点・班活動で楽しいと思うことは何かと問うと，教え合うこと，励まされること等関わり合いを通して感じる内容が 72%も挙げられた。それは，生活班で係や当番を担うことで，すぐ話し合える場（環境）であったためと捉える。
・リーダーの役割（司会，先生への連絡，仲間への声かけ等）を知ることで，おとなしい子もリーダーに挑戦しようとする姿がみられた。
・関わることが苦手な子も，活動内容を工夫することで意欲が見られた。
（書いたり，話し合ったりするだけでなく，身体を使っての発表活動）

課題点・班を使って関わり合いを増やすために必要な教師の働きかけ
・それぞれがリーダーとなれるような，班を使った多様な活動の工夫

文献

大西忠治(1975).『班のある学級』 明治図書出版 pp.66-67.
丹野清彦(2014).『班をつくろう』 くりえいつかもがわ出版.
全生研常任委員会著(1972) .『学級集団づくり入門　第二班』明治図書出版 pp.38-39.